

# 質実剛健を体現された 田尻稲次郎先生の胸の内とは



日高義博  
学校法人専修大学理事長

## 神田新校舎のサロンを 知の発信の場としたい

新年あけましておめでとうございます。今年も大学の運営につきまして、ご支援、ご協力のほどよろしくお願いたします。2019年は年数では創立140年となり、2020年が140周年です。本年はその記念事業の1年前でもあり、商学部の移転、国際系新学部構想の具現化、神田靖国通り新校舎の竣工、これらも間近です。オール専修一丸となって取り組まなくてはならず、貫徹できるよう尽力したいと思っています。私も、例年以上に気持ちの張った新年を迎えています。

この節目に4人の創立者の方に共通して質問するとすれば、「創立140年が経ち、先生方が思われた大学になっているのでしょうか？」とお尋ねしたいですね。開校当初は法律と経済の二学科体制でスタートして、深

く学問を掘り下げる、専ら修める、という意味合いで専修という名前がつけました。現在、学部が7つになり、人文社会科学系の総合大学になってきています。これはあくまで私の推測

ですが、4人の方々は今以上の広がりを考えていたのではないかなと思っています。創立者達が学んだアメリカでは学問の新体系ができあがっていて、彼らは人文系だけではなく、社会科学系で勉強されましたけれども、専ら修めるということの次のステップは、どこまで射程に入れたんだろうということをお聞きしたいです。法律、経済をスタートにした人文社会科学系の総合大学として、いまわれわれは優・良・可でいえば、一応可ぐらいはもらえるのかな、という気がします(笑)。将来の大学の姿をどこまで描かれたのだろうということは、いつも考えています。

私は九州の宮崎で生まれ育ったので、薩摩藩出身の田尻先生には近いものを覚えます。田尻先生は恰好も気にせず、質素な衣服で「きたなり」と呼ばれたことから、号を「北雷」とされました。質実剛健の表れですが、その一方で「田尻先生の心の中は華やかだったんじゃないですか？」ということをお尋ねしたいですね。書をしたため、武道もやられているので、心の中はしなやかな美的なところ、繊細なところがあったんじゃないかな、と。そこは聞いてみたいですね。むしろ心の華やかさがなければ、恰好を気にしないというところまで貫徹できないんじゃない

いかと思います。

4人の創立者がいまのキャンパスをご覧になられたら、コンクリートの建物に違和感を覚えるかもしれません。関東大震災前の校舎は西欧風の瀟洒な造りでしたから、ビルの校舎が殺風景に映るかもしれませんね。ただ大勢の若者が大学で学ぶ姿に、圧倒されるんじゃないですかね。学問を日本語でやらなければ、日本の学問体系はできないという信念のもとに建学され、それが実現していますからね。2万人近い若者が専修大学で学ぶ姿は感無量ではないでしょうか。

私から創立者の方々には、「4人の先生方の思いを繋げる人材が確実に出ていますよ。不思議ですね」とお伝えしたいなと思います。やはり損得抜きで行った教育の理念は間違っていないのだと思います。

神田の新校舎でホール、サロンが出来上がる予定ですが、いろんな方にとって使い勝手の良いものになればよいなと思っています。卒業生の書道展、絵画展、コンサートなど大いに活用していただきたいですね。具体的な内装や名称、活用方法等については未定ですが、知の発信ができる場として大いに活用していけるものになればと思っています。

(談)



田尻稲次郎先生が残された「士魂商才」の書には「北雷」の号が見て取れる。「一日見ても飽きない、なんとも味のある書です」(日高理事長)